

うえだとしろう
上田敏郎



上田敏郎（1864～1912）

写真：「水の歴史資料館」蔵

木曾川の水を名水に変えた —名古屋の近代水道の創設者—

上田敏郎は、1864（元治元）年、江戸で生まれる。1886（明治19）年、東京帝国大学工科大学土木科を卒業したが、在学中にW.K.バルトンから衛生工学を学んでいる。静岡県技師を経て、1899（明治32）年に愛知県技師となる。1902（明治35）年、名古屋市水道布設調査事務を委嘱され、1906（明治39）年に名古屋市水道技師長となった。上田は「先見の明」をもった英知と判断力で、困難な時代に着実に仕事を成し遂げ、「断水のない水道」、「美味しい水」を造った、名古屋の近代水道の創設者である。

■名古屋市の近代水道建設の動き

1889（明治22）年、名古屋市制実施後の上下水道の実態は「人口の増殖は年と共に甚だしく、飲料水は次第に汚水を交ふるに至り、市内各所井水137種の試験成績を見るに、実に其6割強は不良水を飲用する状態なり、下水排除の方法殆ど備はれるものなく、市民は将来衛生上恐る可惨害あらんこと」（『名古屋市史』）であった。名古屋市は、近代水道の建設を1893（明治26）年

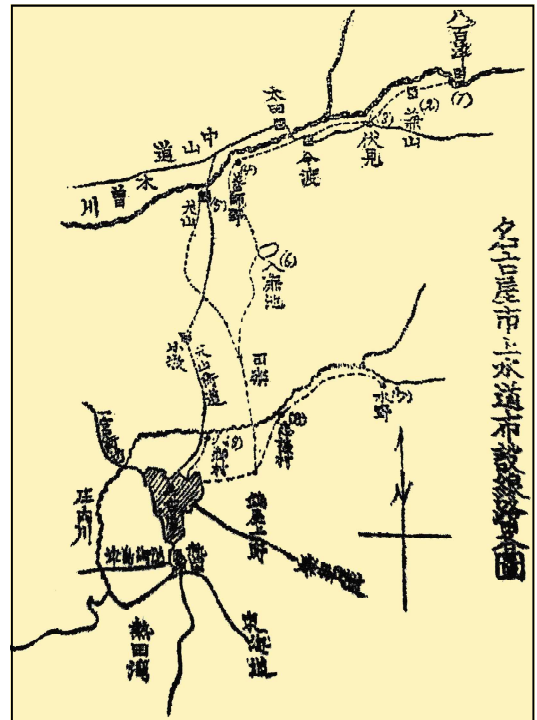
に内務省衛生顧問W.K.バル

ルトンに上下水道の布設の調査を委嘱した。バルトンは、将来人口を27万人と見積り、水源を入鹿池と考えた。翌年6月に「名古屋市給水工二関スル意見書」を提出した。この報告書は、財政面から時期尚早として見送られた。

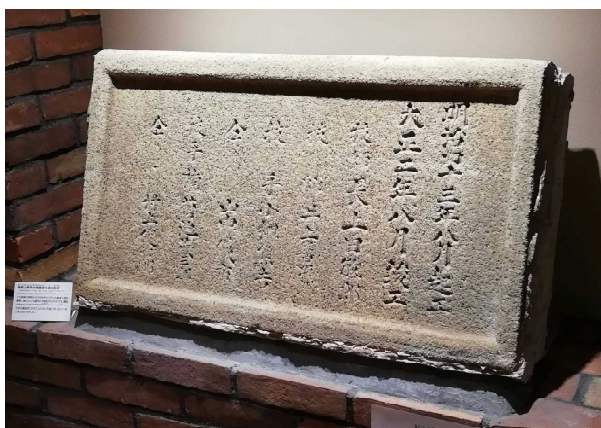
■豊富な木曾川の水を引用した先見性

その後、名古屋市が発展と人口増加により、上下水道の整備が求められた。市は1902（明治35）年、愛知県技師となった上田敏郎に上下水道の調査を依頼した。人口はすでに約28万人となっていた。1903（明治35）年12月、上田は報告書を提出した。調査報告を基に諮問案「上下水道布設ノ件」は、同年12月、市会に提出されたが、日露戦争のため審議未了となった。1906（明治39）年になって市会は諮問案「上下水道敷設ノ件」を提出し予算を伴い可決した。

報告書の要旨は、(1)人口増加を考えて十分な大きさとする。予定人口を60万人と計画、水量は東京市を標準にした施設。(2)水源と水道布設路線について、9案を工事方法、工費等で比較検討し、水量は豊富で水質は佳良な木曾川を水源とする案を最適案であるとした。上田は、報告に基づき丹羽郡犬山町（現犬山市）から木曾



上下水道布設路線略図 出典：『新愛知 明治36年12月9日』



ろ過池に設置されていたコンクリート製の銘板

銘板：「水の歴史資料館」蔵

川の水を引用し、鍋屋上野浄水場でろ過した水を、ポンプで愛知郡東山村（現千種区田代町）の山頂に圧送の上、各戸に配水する計画を立てた。これを基に上下水道の工事を着工した。1914（大正3）年9月1日から給水を開始した。

浄水場の緩速ろ過方式が全国2位の名水を造ることになり、100年経過後の現在も利用している。1988（昭和63）年に緩速ろ過池の補修工事により、創設期の技師長上田敏郎他5名が刻まれたコンクリート製の銘板が発見された。

水道工事の進む中、上田は過労に倒れ、「事業の大成を祈る」の一言を遺し、工事完成前の1912（明治45）年6月1日に逝去した。

（大橋公雄）